

# 教育研究の構想

## 1 これまでの教育研究の経緯

研究主題 豊かな「学び」をつくる子どもの育成

豊かな「学び」をつくる子どもについては、思いやりをもって、集団の一員であることを自覚し、知識・技能、学び方を習得し、これを活用する思考力・判断力・表現力を身に付け、課題解決を目指して、豊かなものの見方や考え方、自分自身への気づきの獲得を求めて、学び続けていく姿であると考えた。

また、教育研究をより具体的に進めていくために、研究主題に研究副題をつけ、次のように年次ごとに研究を深めてきた。

平成20年度 (一年次)	<b>豊かな「学び」をつくる子どもの育成 ～子どもの学びをとらえる～</b> <ul style="list-style-type: none"><li>・豊かな「学び」をつくる子どもの姿を確定する。</li><li>・一貫して育てていく力を明確なものにし、その力の育成を目指した子どものとらえの在り方を探る。</li></ul>
平成21年度 (二年次)	<b>豊かな「学び」をつくる子どもの育成 ～子どもの学びをつなぐ～</b> <ul style="list-style-type: none"><li>・保育・教科で一貫して育てていきたい思考力・判断力・表現力を明確にする。</li><li>・思考力・判断力・表現力を育てるうえで有効なかかわり合いの在り方を考察する。</li></ul>
平成22年度 (三年次)	<b>豊かな「学び」をつくる子どもの育成 ～子どもの学びをつむぐ～</b> <ul style="list-style-type: none"><li>・保育・教科でとらえた思考力・判断力・表現力について発達段階（本学校園が独自に設定している教育研究ブロック等）に応じて整理する。</li><li>・学級全体で学び合う中で、思考力・判断力・表現力を育てたり高めたりするための保育や授業の構想とそこでの教師のはたらきかけの在り方を探る。</li></ul>
平成23年度 (四年次)	<b>豊かな「学び」をつくる子どもの育成 ～子どもの学びを開く～</b> <ul style="list-style-type: none"><li>・保育・教科で平成22年度整理した教育研究ブロックごとの思考力・判断力・表現力を育てるための具体的な活動をイメージし、一貫教育カリキュラムを改訂する。</li><li>・学び合いを通じた思考力・判断力・表現力の育成について、その保育や授業の構想や教師のはたらきかけについてさらに深め、その評価の在り方を提案する。</li></ul>

平成20年度の研究で、子どもの思いや願いを教師がとらえ、それによって保育や授業を構想したり、展開する中で生かしたりすることのよさについて、実践を通して明らかにすることができた。平成21年度から、「確かな学力」の育成を目指して思考力・判断力・表現力の育成に焦点を当て、子どもの学びをつなぐことを研究した。その中で、個と個の学びのつながりや、時系列における個内での学びのつながり、個と学びの対象とのつながりなど、さまざまなつながりの重要性が見えてきた。また、思考力・判断力・表現力を育成するために、子どもにかかわり合いをもたせたところ、かかわり合いは思考力・判断力・表現力の育成に有効にはたらくことがわかった。以降、思考力・判断力・表現力を育て高めたりするためのかかわり合いを、本学校園では「学び合い」と定義し、学び合いについての研究を深めてきた。平成22年度には、保育・教科でとらえた思考力・判断力・表現力を教育研究ブロックごとに整理し、平成23年度には、これを一貫教育カリキュラムに盛り込むことができた。また、平成23年度は、思考力・判断力・表現力の評価の在り方について研究し、提案した。

## 2 これまでの教育研究の成果

本学校園では、幼小中一貫教育の11年間の学びを通して、「確かな学力」の育成を目指し、豊かな「学び」をつくる子どもの姿の実現に向けて、思考力・判断力・表現力の育成に焦点を当てて研究してきた。これまでの研究で、思考力・判断力・表現力を育てたり高めるための学級全体での学び合いを成立させるためには、活動や単元におけるねらいを明確にし、そのねらいに沿った全体の構想の中に学び合いを位置付けていくことが大切であることや、学び合いの場面での教師のはたらきかけはどのようなものが有効かがわかってきた。以下に、これまでの保育・教科研究の成果を述べる。

### (1) 教育研究ブロック別に整理した思考力・判断力・表現力の11年間のつながり

本学校園全体でとらえる思考力・判断力・表現力を教育研究ブロック別に定めたいうえで、保育・教科ごとに、思考力・判断力・表現力を教育研究ブロック別に整理し、11年間のつながりを明らかにした。その結果、保育や各教科の特徴を踏まえた上で、保育・教科の枠組みを超えた子どもの発達段階の特性があることが次のように見えてきた。

初等部前期では、子どもの学びの対象となるものが遊びや生活と密接に関係している。初等部前期の思考力・判断力・表現力は、「やってみたい」という自発的な学びの意欲が追求の原動力となり、没頭して遊んだり体験したりすることで、自分なりの思いや考えを確かにもつようになり、それを素直に伝え合おうとする力であると言える。伝え合う手段としては、言葉だけでなく、絵を描いたり身振り手振りなど体を使った表現もある。

初等部後期では、子どもの学びの対象は、身の回りの生活に関わる具体物である。この発達段階の子どもの思考力・判断力・表現力は、学びの対象に直接はたらきかけて自分なりの考えを明確にし、友だちの考えと比較したり考えを取り入れたりしながら、多様な表現方法を用いて工夫したり説明したりする力であると言える。

中等部では、子どもの学びの対象は、社会的なものや抽象的なものなど広がりを見せる。この発達段階の子どもの思考力・判断力・表現力は、学びの対象に対して、自ら問題を見出し、様々な考えを取り入れながら論理的に考えたり一般化しながら最適な方法を見だし、相手に伝わるように発信したりしていく力であると言える。

思考力・判断力・表現力は互いに関連し合って育成される力であり、様々な教育活動における学びが関連し合って、11年間でつながって育成される力である。初等部前期の思考力・判断力・表現力が素地となり発達段階を踏みながら、何度も問い直しをしたり学び直しを繰り返したりすることでじっくりと育成されるものと考えられる。

### (2) 思考力・判断力・表現力を育成する学び合いのための単元構成について

思考力・判断力・表現力を育成するための学級全体での学び合いを成立させるためには、活動や単元全体の構想が重要で、ねらいを明確にし、ねらいに沿った展開の中に学び合いをどう位置付けていくかが大切である。また、個々の子どもに自分の考えを確かにもたせることが重要であることがわかった。つまり、個々の子どもに確かな自分の考えをもたせた上で学び合いの場を設定することが大切であると言える。

初等部前期では、教師と子どもの1対1の関係が大切で、子どもは認められているという安心感の中で、自分の考えを確かにもつようになる。初等部後期からは、ペア学習やグループ学習が有効になる。子どもは、相手を意識しながら自分の考えが伝わるように思考しながら表現する中で、より確かに自分の考えをもつようになる。このペア学習やグループ学習のほかにも、

発達段階に応じた個々の子どもに自分の考えを確かにもたせるための手だては様々である。自分の考えを個々の子どもに確かにもたせることは、思考力・判断力・表現力を育成する学級全体の学び合いを成立させるための、不可欠な要素と言える。

### (3) 思考力・判断力・表現力を育成する学び合いのための教師のはたらきかけについて

思考力・判断力・表現力を育成する上で、学び合いの場面で、教師の「掘り下げる」「提案する」はたらきかけが有効であることがわかってきた。「掘り下げる」はたらきかけは、子どもの考えが分散したり、ぼんやりとしたりしているときに行うことで、子どもの考えを明確なものにしていくことができる。学び合いにおいて、子どもたちが表した考えを明確にすることは、他者の考えと自分の考えとを比べて共通性や相違性を明らかにでき、一つの考えをより深めたり広げたりするという効果がある。「提案する」はたらきかけは、子どもたちの考えが偏ったり不十分だったりしたときに、広げたり違う視点を与えたりするはたらきかけのことで、ねらいに向かった学び合いを実現できる。

かかわり合いの場を設定すれば、思考力・判断力・表現力が育成されるわけではない。学び合いの場で、教師が子どもに何を思考させたいのか何を発容させたいのか明確な視点を持ち、子どもをとらえて、思考させたいことを「掘り下げたり」「提案したり」することによって、子どもの思考は深まり、発容する。子どもに思考させたい視点は、活動や単元のねらいにせまるもので、活動や単元を貫く柱につながっているものと考えられる。

### (4) 学び合いによる思考力・判断力・表現力の評価

思考力・判断力・表現力が育ったかどうかは、主に子どもの姿からとらえ分析した。さらに、個々の思考力・判断力・表現力の育ちや高まりを、できるだけ客観的にとらえる方法を研究した。各教科・保育の実践では、学級全体の学び合いの場面での思考力・判断力・表現力について、具体的な評価規準・評価基準を設定し評価をした。しかし、1時間の活動や学習で子どもの学びが大きく発容することがあっても、思考力・判断力・表現力が1時間で大きく変わることはないと考え、単元を通して思考力・判断力・表現力の高まりを評価をすることにした教科が多かった。思考力・判断力・表現力を評価する評価資料は、言葉・式・図・表・絵・グラフなどを使用した発言や記述によるもので、作品やレポート、日記やふりかえりやイメージマップなど様々なものがある。一人一人の子どもを評価することは容易なことではない。しかし、評価基準に基づいて一人一人の分析を行ったことは、子どもの思考やその発容を的確にとらえることになり、学び合いの場面でのはたらきかけにいかすことに役立った。また、子どものふりかえりや自己評価は、子ども自身が自分の発容を認識することにもつながった。

中央教育審議会初等中等教育課程部会（2010）「児童生徒の学習評価の在り方について（報告）」には、「各学校における学習評価は、学習指導の改善や学校における教育課程全体の改善に向けた取組と効果的に結び付け、学習指導に係るPDCAサイクルの中で適切に実施されることが重要である。」と述べられている。本学校園においても、学び合いの評価を、授業改善や個に応じた指導の充実、指導計画等の改善に役立てるものになりたいと考えている。

### 3 本年度の研究

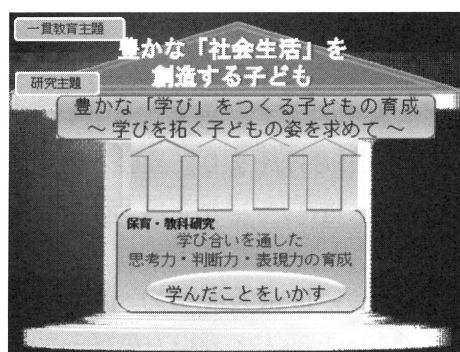
#### (1) 本年度の研究主題・研究副題

研究主題 豊かな「学び」をつくる子どもの育成 ～学びを拓く子どもの姿を求めて～

私たちは、幼小中一貫したすべての教育活動を通して、豊かな「社会生活」を創造する資質や能力を育成したいと考えている。そして、よりよい暮らしを創り上げ、よりよい自分を創り上げるために、まわりにはたらきかけながら、主体的に、この資質や能力を有効に作用させていける人間になって欲しいと願っている。これまで私たちは、子どもの実態や変容を把握し、ねらいにせまるための単元構想や教師のはたらきかけなど、教師が子どもをいかに導くかを研究してきた。豊かな学びをつくり、豊かな「社会生活」を創造する子どもを育成するためには、今年度はさらに、これまで学んできたことを自らいかしながら、新たな学びをつくりあげていく子どもを育てることが大切だと考えた。このような子どもの姿を私たちは、「学びを拓く子どもの姿」と表し、研究主題・研究副題を、「豊かな『学び』をつくる子どもの育成 ～学びを拓く子どもの姿を求めて～」とした。

将来、子どもたちの家庭・職場・地域・社会における問題や状況に対して、他者との合意形成を図りながらよりよい方法を見つけ出し、協働的に自律的に行動できる力を、子どもたちは身に付けなければならない。11年間の附属学校園での学びを礎として、自ら学びを拓く人間になって欲しいという願いをもって、私たちは一貫した教育活動を行っている。

保育・教科では、これまで、確かな学力の育成を目指して思考力・判断力・表現力の育成に焦点を当てて研究をしてきた。今年度も、これまでの研究を基盤に、学び合いを通した思考力・判断力・表現力の育成のためのよりよい保育や授業の構想や教師のはたらきかけについて研究を深める。その中で、思考力・判断力・表現力を育て高めるために、学んだことをいかすことに焦点を当て、保育や授業の在り方を明らかにしていく。学んだことをいかすためには、学んだことが、子どもにとって生きてはたらくものになっていなければならない。学んだことが生きてはたらくものとなるためには、学びが断片的なものではなく、構造化されたものになっていなければならない。そのためには、思考力・判断力・表現力が必要であり、また、その学びによって思考力・判断力・表現力はさらに高まると考える。保育・教科において、研究の基盤に学び合いをおき、学んだことをいかす経験を積み重ねさせ、学んだことをいかすことのよさを認識できるようにすることを大切にしていくことが、将来にわたって自ら学びを拓く人間の育成につながると考える。



#### (2) 研究の方法

学んだことをいかす子どもの具体的な姿の例として、「学んだことを実感し、新たな課題を見つけている。」「学んだことを根拠にして、自分の言葉や図で表している。」「学んだことをくらしと関連させている。」「お互いの考えについて評価し合い、よりよいものを求めている。」「新たな課題に対し、学んだことと結び付けて、予想している。」「自分の考えを確かめるために試し、よりよいものにしている。」などを挙げてみた。

各教科・保育において、学んだことをいかす子どもの姿をイメージしたとき、保育や教科の

特性や発達段階の特性によって、違いがあると思われるが、学んだことをいかすことに焦点を当て、思考力・判断力・表現力を育成するための保育や授業の在り方を探ると、共通したものがあると思われる。各教科・保育において、学んだことをいかすために特に大切にしたい姿をあげ、その姿が現れるためには、何が大切かを保育・授業実践を通して明らかにしていくことにした。

### (3) 研究の実際

学んだことをいかすことに焦点を当て、思考力・判断力・表現力を育成するための保育や授業の在り方について研究する中で、次のようなことが挙げられた。

#### ① 関連付けられた深い理解

学んだことをいかすためには、学んだことを根拠にして説明をすること、比較して共通点や相違点を見付け出すこと、学んだことを強く結び付けていくこと、お互いの考えについて評価し合うことなど、思考・判断・表現を伴って、学んだことをネットワーク化していくような理解が大切なことであると考えられる。子どもは、このような学習によって思考力・判断力・表現力が高まり、自分の学びが明確になり関連付けられた深い理解となって、次なる場面においても学んだことをいかすことができると考える。

これに着目して、国語科では、理由（根拠をもとに自分の言葉で表現すること）へと掘り下げるはたらきかけを大事にして、子どもの読みの高まりを期待する。理科では、科学的思考を促しているものが科学的な見方・考え方に基づく予想や仮説であるととらえ、関連付けられた理由や根拠をもとにした科学的な表現を大切にする。体育・保健体育科では、動きを見合うことで、互いの考えについて評価し合い、見えにくかった自分やチームの動きを視覚化していくことで、よりよいものを求めていくことを大切にする。

#### ② 主体的な学習者としての学び

子どもが主体的な学習者として、自分の考えを確かめるために何度も試行し、よりよいものにしようとするとき、学んだことをいかす姿が見られる。保育では、友だちとの関わりを通して気付いたことや経験したことを基に、自分の願いを実現しようとする姿に視点を当て、子どもの気付きや感動などを共有できるように工夫していく。音楽科では、自分の考えや思い、意図を確かめるために繰り返し試し、よりよい音楽表現を追究していくことを大切にする。体育・保健体育科では、出会った運動において、自分の考えを確かめるために試みに動いて、調整しながらよりよいものしていくことを大切にする。外国語活動・英語科では、言語の実際の使用につながるような言語活動の充実を目指し、実際に使ってみる（試行）機会を与え、自分のもっている知識・技能を活用し、運用する力を確かなものにするを大切にする。

これらの保育・教科では、子どもが主体的な学習者となるような動機付けをして、子どもが試行錯誤を繰り返し、自分自身で学び直したり問い直したりする活動を大切に考えている。子どもが主体的に学ぶとき、学びが深まり、思考力・判断力・表現力が高まっていく。算数・数学科では、学んだことをいかしている姿を、数学的な思考力・判断力・表現力を用いて、課題解決を目指している姿とし、学んだことをいかすような学習機会を意図的に設定していく。その中で、情意面においても学んだことをいかしたいと感じることができるよう授業づくりによって、実感を伴った理解を大切にする。

また、子どもが自分自身を振り返ることも、主体的な学習者として大切である。子どもが、自分の追求の深まりや広がりを認識し、変容に気付くためのふりかえりは、子どもの学びに対

する意識が高まり、主体的に学びをつくりあげたり学びを自覚したりすることにつながっていると、社会科や図画工作・美術科ではとらえている。

### ③ 日常や社会とのつながり

日常や社会に目を向けて、学んだことをいかすことを大切に考えている教科もある。技術・家庭科では、学んだことを子ども自身の実生活にいかすために、生活の中での実践に向けて課題を設定し課題解決を行っていく。社会科では、自らのくらしや社会生活にいかし、より豊かにしようとする姿になりうるかという視点で評価規準を定め、学び合いの有効性を検討する。理科では、学習したことが自分の身のまわりの世界とどのようにつながっているのか考えさせることを大切にする。また、算数・数学科でも、日常生活や社会の中でいかしていく側面を考えていく。学んだことを、直接的に日常や社会の中でいかすためには、複雑に関連付けられた知識や技能を活用することが必要となり、思考力・判断力・表現力が高まる。また、学んだことを日常や社会とつなげることは、子どもが、学びの有用性を実感することにもなる。

総合的な学習の時間の活動は、全ての教育活動で身に付けた学びを、生活や社会に目を向けて、直接的にいかしていくものである。それぞれの発達段階における豊かな社会生活を創造する資質や能力を、子どもは主体的に精一杯発揮して問題や課題を解決をしていく。多くの学びがいかされる学習である。

### ④ 相手意識

学んだことをいかす子どもの姿を求めるとき、相手意識も大切である。本学校園は、思考力・判断力・表現力を高めたり育てたりするかかわり合いを学び合いと定義した。この学び合いは、相手によく分かってもらおうと説明をしたり、相手の考えと自分の考えを比較して思考したりするなど、相手意識があるからこそ思考力・判断力・表現力が高まる学びである。外国語活動・英語科では、会話を進めて課題を解決する活動をするとき、相手の反応を見て受け入れたり、自分の主張を通したり、状況を判断して自分で表現を選択し、使い分けることが大切であり、相手意識が必要不可欠であると考えている。生活科では、没頭して何度でも挑戦できるような体験活動の場を用意し、気付きが広がり深まるように、子どもたちが活動したことやその中で気付いたことを伝え合う活動を大切にしていく。

総合的な学習の時間では、発達段階が上がるにつれて、対象とする相手が多様に広がっていくが、相手に役立っている自分を認識することで、さらに学習意欲が高まり、学んだことをいかす学習が展開される。

以上、学んだことをいかすことに焦点を当てた思考力・判断力・表現力を育成するための保育や授業の在り方を探る今年度の研究において、保育や各教科等が何を大切に考えているかを述べた。学んだことをいかす学習プロセスに様々な視点を当てることによって、思考力・判断力・表現力を育成していきたい。保育・各教科等における研究の詳細を以下に示す。保育・各教科等で学んだことをいかす経験を積み重ねることが、自ら学びを拓く人間の育成につながっていくことを願っている。 (文責 高橋 里美)

#### 【参考文献】

- ・秋田喜代美・藤江康彦 (2010年3月), 授業研究と学習過程, 日本放送出版協会
- ・高垣マユミ 編著 (2010年4月), 授業デザイン最前線Ⅱ, 北大路書房
- ・森敏昭・秋田喜代美 監訳 (2009年6月), 授業を変えるー認知心理学のさらなる挑戦, 北大路書房